

●鳥取市令和3年度～5年度「輝く中山間地域創出事業」福部駅周辺の整備事業の取り組みが紹介されました。

鳥取市の「輝く中山間地域創出事業」補助金を活用して、福部駅のリニューアル・駅周辺の美化活動・福部駅を拠点としたイベントなどのソフト事業の取り組みが日本海新聞で紹介されました。

日本海新聞・令和4年8月289日（日曜日）

本 海 新 聞 (第3種郵便物認可)

福部駅 住民ら再整備

にぎわい創出へ

駅舎にイラスト、催しも

鳥取市福部町の住民団体が今秋、JR福部駅の再整備に乗り出す。住民主導で町内八つの団体が連携し、駅舎壁面の塗装や路面の修繕のほか、駅を拠点にしたウォーキングなどを計画。利用者の減少で地域交通の在り方が課題となる中、ハードとソフト両面で駅前になぎわいを呼び込もうと意気込む。(野木絢)

同駅は1910年に「塩見駅」として開業。72年に無人駅になった後、87年の国鉄民営化により現在の小規模な駅舎に改築された。JR米子支社によると、2021年の同駅の1日平均乗客数は58人。周辺の人口減少などで年々落ち込んでいる。JR西は4月、利用者が特に少ない赤字路線の収支を公表し、同駅を含む山陰線鳥取一浜坂間も対象となった。活動の旗振り役を担うのは、多鯨ヶ池周辺の景観保全や魅力向上に取り組み「浜湯山・多鯨ヶ池活性化委員会」。代表の銅牛明さん(74)は孫が高校生とき、毎朝車で同駅まで送っていた。アレハブ風の味気ない駅舎や伸び放題の木など、荒廃する様子を目の当たりにし、改善の必要性を痛感していた。銅牛さんによると、福部地域振興会議が中心となり19年、駅の活用などまちづくりの実施計画が示されたが「絵に描いた餅に終わらず」。

駅舎壁面は同町出身のイラストレーター、伊吹春香さん(32)が書き下ろしたイラストに生まれ変わる。1人の女性が福部を旅する内容で、鳥取砂丘やラッキョウなど地元の名所や特産品を4面に描き分け、映える「スポット」を自指す。事業は23年度末までの予定で、来夏には駅を拠点に名所を巡るウォーキングや、ラッキョウや梨を使った料理教室の計画もある。銅牛さんは「鉄道の利用者を増やすことは簡単ではないが、駅は町の玄関口。JR西や関係機関と連携し、鳥取砂丘など地域の観光資源と駅をつないでにぎわいを生み出す仕掛けを考えたい」としている。

無人駅になって半世紀を迎えたJR福部駅。住民が主体となって1帯の修繕や美化促進を図る。24日、鳥取市福部町栗谷

伊吹さんがイラストした駅舎のイメージ(部分)。鳥取砂丘など名所や特産品を4面に描き分ける。


